第一部

衣を脱いだ小倉百人一首

「四つの恋の歌」

詩：石田 巍
曲：いとう たつこ
歌：天野 深世
二十絃：木村玲子

「秋にしづもる」

詩：高原 桐
曲：松村 百合
歌：伊藤 香代子
箏：遠藤 千晶
篠笛：松尾 慧

二つの歌曲

「灰汁色」「萌木色」

詩：なべくら ますみ
曲：高橋 通
歌：鈴木 房江
箏：高橋 澄子
打楽器：児玉 和人

「淀の化身」

詩：西岡 光秋
曲：小森 昭宏
歌：秋山 恵美子
尺八：米澤 浩
箏：熊沢 栄利子
打物：多田 恵子

第二部

「スペクトル —— 大野一雄氏に寄せて」

Spectral (for Kazuo Ohno)

詩：貞松 瑩子
曲：ダリル・ゼミソン
歌：きむら みか
笙：石川 高
薩摩琵琶：櫻井 亜木子

「祈りの花筏」

花はその身を折って溺れる人を救ったという
—— 近江むかし話「花折峠」より

詩：木下 宣子
曲：池上 眞吾
歌：横山 政美
箏・三絃：池上 眞吾
十七絃：吉澤 延隆
尺八：大河内 淳矢

「石仏」

詩：笠原 三津子
曲：近藤 春恵
歌：森田 澄夫
箏：砂崎 知子
十七絃：高畠 一郎

「五色沼」

詩：藤井 慶子
曲：田丸 彩和子
歌：青山 恵子
尺八：設楽 瞬山
薩摩琵琶：岩佐 鶴丈

ごあいさつ

社団法人日本歌曲振興会常務理事
「邦楽器とともに」代表 森田澄夫

本日はお忙しいなか、ご来場頂きまして誠にありがとうございます。

明治以来、日本の激動期とともに歩んできた近代音楽の歴史は、開国以来、国是として取り入れた西洋音楽を、日本人の音楽として消化吸収に努めた歴史でもあります。その結果、日本人という枠を超えた幾多の音楽家たちが、日本のみならず世界中で大活躍しています。

一方、伝統邦楽の世界でも、これまで培ってきた日本音楽を守り伝えるだけではなく、広く西洋音楽を理解し、柔軟に対応できる邦楽奏者が大変多くなりました。それも、そのような若い演奏家たちがこれほど多く現れた時代はありません。彼らは、まるでパイリンガルの帰国子女たちのように、邦楽器を使って易々と洋楽演奏家とのアンサンブルをこなします。この奏者たちが居る今こそ、この企画は成り立つわけです。そして、作曲家、声楽家双方が邦楽器と、それに伴う音楽の理解をより深める時、その未来は、これまでとは一味違った新しい日本歌曲の世界を我々に見せてくれることでしょう。今年も、外国人作曲家として、カナダ人、ダリル氏の参加を見ました。

「東西の融合、東から西への発信」という大きな目標に向かい、様々な課題を克服しながら邦楽奏者とともに手を携えて一歩一歩前進して参る所存です。

今後ともご指導ご鞭撻をお願いするとともに暖かいご支援のほど、宜しくお願い申し上げます。

【第七回「邦楽器とともに」実行委員】
中村綾子　青山恵子　鴨川太郎　木下宣子
千秋次郎　伊藤香代子　きむらみか
関根恵理子　高島和義　高橋久美子
田丸彩和子　藤井慶子　横山政美
和澤康代　森田澄夫

作品解説

◆衣を脱いだ小倉百人一首
四つの恋の歌

最初は万葉集を題材にしようと思った。万葉集にはダイナミックな恋の歌がたくさんある。しかしどれも骨太で私には合わなかった。もっと軟弱な恋の歌が欲しかった。そこでたどり着いたのが小倉百人一首。子どもたちが意味もわからず遊んでいる、これもおかしかった。「本当は恋の歌なんだぜ、これは」。始めは解説本みたいな気持ちで書いたので、最初につけた歌のタイトルは【小倉百人一首解説】。その後徐々に変化して現在の形になった。これを機会に日本の古典に親しみを持っていただけると嬉しい。姉妹編に【小倉百人一首・季節の歌】がある。

［石田　巍（詩）］

◆秋にしづもる

俳句と短歌を組み合わせることによって、より広やかでより深い秋の世界の表現を試みる。　そこには秋を迎えて燃え立つ自然に人々が切々と寄り添って生きていく様を、静かに、心の故郷に憩うかのように描く。篠笛に事寄せて、懐かしいような日本の錦秋と日本の心にしばらく私を委ねたい。

［高原　桐（詩）］

◆二つの歌曲
～なべくらますみ詩集「色分け」より

「灰汁色」残渣

植物を燃やして水と混ぜたものの上澄みである灰汁は、えぐみや渋み、独特の粘着質を思い起こさせるが、媒染材として独特の役割をはたす。灰汁色は、黄色みがかった灰色で落ち着いた深みのある色である。そんな灰汁色の中に詩人が見つめたものは何だったのだろうか。

「萌木色」季節

萌え木、萌え黄、萌葱。冬が終わると春がやってくる。その象徴は木々の芽吹きであり、淡い色合いの中に季節の移ろいを感じる。冬の寒さの中で春を待ち続けていた細い木の芯に何かを感じ取った詩人の心。こんなことを考えながら作曲しました。

［高橋　通（曲）］

◆淀の化身

古い話になるが、大学の日本文学科の卒業論文で、私は、井原西鶴に挑戦した。タイトルは「西鶴の女」。文学に対する私の究極の目標は、人間そのものの愛憎の綾、さらには男女の心の機微の絡みに関心を置いていた。芭蕉、蕪村を頂点とする江戸文学のなかでも、やや遠い位置にいた感じの西鶴の偉大な側面にもっと目を向けてもいいのではないか、そう考えてきた私の井原西鶴観は、私の小説における創造の姿勢でもあった。今回は、私の短編小説のなかから、西鶴の諸国はなしのなかの一編、「淀の化身」に取材した溜池の鯉と飼主の川魚漁師との哀憐の縁（えん）をまとめてみた。

［西岡光秋（詩）］

◆スペクトル ― 大野一雄氏に寄せて
Spectral (for Kazuo Ohno)

「舞踏」の開拓者、故・大野一雄に寄せて。大野氏の友人、貞松瑩子氏による詩は空間、影、光、無限性といったイメージを用いてこの人物の普遍性を語る。曲構成にあたり、各イメージに順次応じてみた。ある時は抽象的に、ある時はコトバで象り―、結果はちょっとしたモチーフの繰返しでリンクする逸話を集めたような構造になった。琵琶と笙の霊妙な音世界は光と影、生と死の間の哀しく、なお祝福された空間の表出にぴったりだ。音域も音量も限られた楽器。が、限られてこそ創造性は拡がる。テキストの詩趣と、曲想の源泉たる人物の芸術性に応えたい、と望むばかりである。［ダリル・ゼミソン（曲）］

◆祈りの花筏

横山さんのふるさと近江でのリサイタル曲としてイメージしたのは、近江むかし話の中の「花折峠」をもとに、日本画家・三橋節子が描いた涅槃図でした。花がその身を折って浮かべた花筏。先の大津波で沖に流されてゆく母親が、遠ざかる娘を励まし叫びつづけた「ありがとう」。その実話に衝撃をうけ「花折れ」という美しい言葉とその由来を重ねて、死者へのたむけにしたいと思いました。

［木下宣子（詩）］

突然、引き裂かれる状況の中、母は力の限り感謝と希望の言葉を娘に贈った。想像するだけで胸が詰まります。木下宣子氏と池上眞吾氏から生まれた素晴らしい作品に感謝をし、池上氏、吉澤氏、大河内氏とともに心を込めて歌いたい。

［横山政美（歌）］

◆石仏

自然の中にひっそりと佇む石仏…いつしか情景は時代を飛び越えて、遥か昔の戦乱の世を生き抜いた石の「叫び」を聞き、石工は思いを馳せる…久遠の年月に閉じ込められた霊の情念が一瞬ほとばしり、また元の静けさの中に戻る笠原三津子氏の「石仏」は幻想的な風景の広がりと品格を感じる詩である。私にとって邦楽器による歌曲は今回が初めてであるが、日本語による声楽と箏本来のソノリティとの親和性が自然に紡ぎだす様々なニュアンスが発見できて楽しんで書くことが出来たと思う。殊にこの詩の要である過去へのスリップ場面では、「声」によるタイム・ラグとして伝統邦楽における謡的な要素を使った。

［近藤春恵（曲）］

◆五色沼

五色沼は磐梯高原にある湖沼群であり、檜原湖畔より東へ三キロメートルにわたって小湖沼が点在する。かれこれ二十数年前になるがこの地を訪れてその神秘的なたたずまいと美しさに魅せられた。沼は深い底なし沼のようによどんで、暗い水底から木もれ陽をあびた沼の眼（まなこ）が光っていた。沼は緑色、白みを帯びた青色、赤みを帯びた青色と漂って、風が沼をなぞる度に微妙に色が移ろい、美しいよそおいを見せていた。沼のほとりにたたずみながら、人の一生も沼のように移ろいながら、いろいろな色に染められ、意想をめぐらし、光りを求めて、終着点に達するのではと…ふとそんな想いにかられた。

［藤井　慶子（詩）］